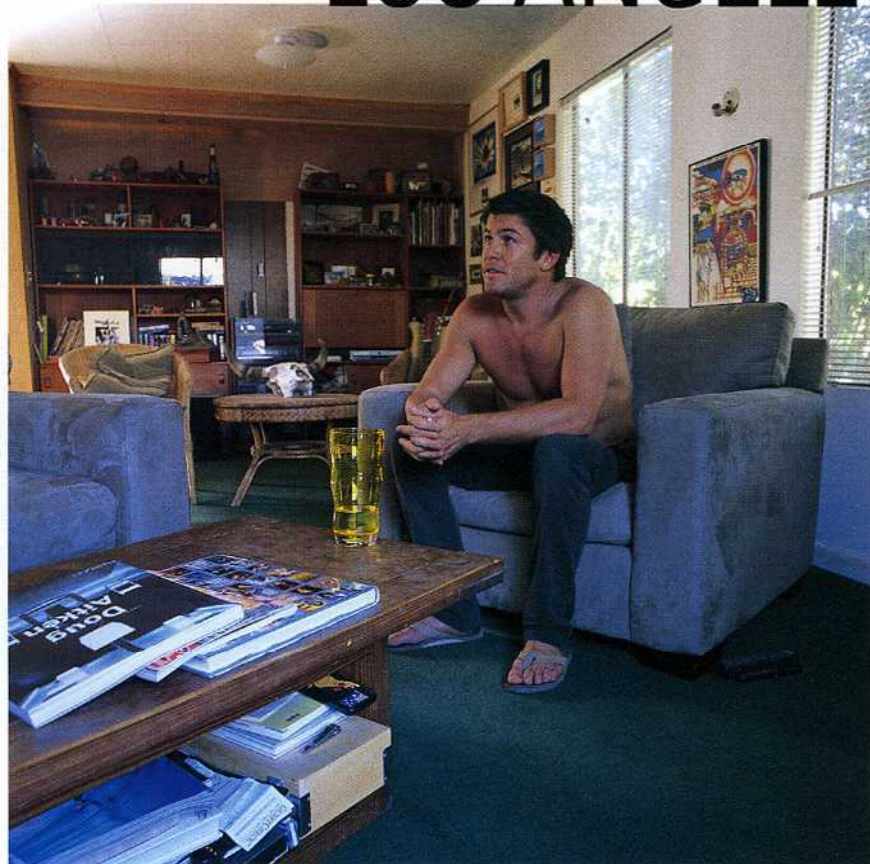


# Malibu

## LOS ANGELES COUNTY



### あらゆる意味でセレブなマリブで、 気負いなく暮らすプロサーファー ジミー・ガンボア(28歳)の家

ロサンゼルス・カウンティはご存知の通り、世界中のセレブが集まる場所。もちろん、ハリウッドがあるからなのだが、時代のメイストリームという意味合いで言っても、今やNYではなくLAなのだ。ここにはそんな都会のもつ活きの良さがある。では、サーフィンにおいてマリブはどういう場所なのか。40年代にはすでに、このエリアで生まれ育ったサーファーたちのコミュニティがあり、50年代後半にはミッキー・ドローに見られるように、マリブの波とこ

50、60年代のマリブはサーフィンの中心地だった

この旅の始まりは、マリブのジミー・ガンボア邸宅。終着地はサンディエゴ。距離にして153マイル。時間になると約2時間半。訪れるサーファーの家は全部で8軒。PCH沿いにサザンカリフォルニアを北から南へ縦断し、次から次へと家訪問の旅。見たいのは、サーファーたちのナマな姿。"顔は本心をあらわす"というように、"家はその人の生き様をあらわすもの"だと思っから。ちょっときれいに化粧(掃除)したくらいではごまかせません。ついでとで、このカリフォルニアン・サーファーの家を巡るPCHストーリーが始まった。

# Visiting the Malibu to San Diego

# Californian Surfer's Houses

## サザンカリフォルニア PCHサイドストーリー

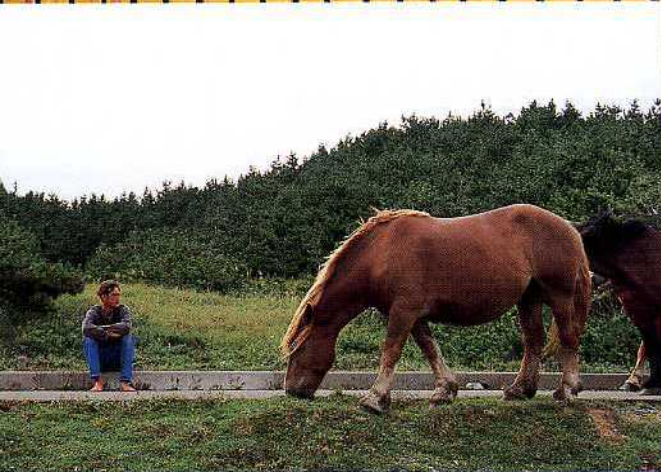
カリフォルニアを縦断するビーチロードPCH(パシフィック・コースト・ハイウェイ)。この道沿いには、ロサンゼルス、オレンジ、サンディエゴの3つのカウンティ(郡)が広がっている。PCH沿い一帯に暮らすサーファーたちが60年代半ば以降に新しいビーチカルチャーを生み、70年代以降の世界中のサーフカルチャーに影響を及ぼし、ムーブメントを起こして来たのはご存知のとおり。そんな南カリフォルニアをPCH沿いにドライブスルー。目的は……? リアルサーファーたちが住まうことで育まれる、本物のサーファーズハウスを探访するため。建築家には創造することのできない、サーファーならではの住空間をめぐる旅。

photography Todd Saunders / text Meiko Shinomiya





思い立ったらすぐ行動。千葉から台風を追いかけ、翌日には台風のうねりをゲット。今回の旅の斬り込み隊長、デビさんのキックファイブ



北日本トリップ Part-1

*North by Northeast*

# 本州最北端、 波を求めて青森へ

夏の終わりに日本に向かって接近してきた、スーパータイフーン"IOKE"。この台風からの最高のうねりを手に入れるため、木下デヴィット、宮内謙至、芦沢崇のプロ3人は、東北へ向かった。そこでは、期待していたほどのビックウェイブには遭遇できなかったが、豊かな自然の中、それぞれが充分な波と思い出を手に入れた。

Text: David Kinoshita 文/木下デヴィット  
Photos & Caption: Kenyu 写真とキャプション/高橋賢勇

## スーパータイフーン "イオキ"が日本に接近

何だかハリケーンが日付変更線を越えて台風になり、こっちに向かってきているようだ、と誰かに聞いた。しかもかなり大きいらしい。なんであつちの方からハリケーンが来るのかな、と考えたが、こんなことはかなり珍しい。熱帯低気圧は海水温の高い方へ進むと聞いたことがあるので、イオキができてからハリケーンになり、たまたま日本の方に海水温の高いところがあつたのかな、とかいろいろと考えた。だがこのことは気象予報士でさえわからないというから、自分にわかるはずもないが、年々世界の気象状況が激しくなっているのは確かかなようだ。

天気図を見ると少し楕円形の大型の台風だった。楕円形の台風は進行方向がよくわかる。クロスを楕円の中に引き、長い方が進行方向ということがほとんどだ。そしてもちろん北側へと進路を取る。そこからわかったことは、イオキは房総半島へ向かってきている。その2日後くらいに、これまであまり見たことのないワイドなブレイクの膝くらいの波が地元へ届きはじめた。最初は北海道沖に抜けた低気圧のバックスウェルかな、と思つたが向きが違う。これはあきらかに南東のうねりだ。夕方には腰から胸と、そのワイドなうねりは間隔も広く、明らかに遠い3,000キロも離れたハリケーンのうねりということがわかる。その翌日、部原は少しくロウズ気味なので、ジェットスキーで沖のリーフを見に行つ

た。サイズはトリプルはあるだろうか？ だけど全然乗れそうにない。セツトが止むとあまりに沖のため、どこで波が割れるかがわからなくなるので、割れる場所を何となく覚えて、その沖のリーフを後にした。次の日は朝の4時半に目が覚めた。海を見た瞬間に焦った。大きくなるのはわかっていたが、まさかここまでサイズアップするとは思わなかった。昨日とはまったく別世界。あまりの大きさにどこで割れているかもわからない。勝浦にはまだ誰も乗っていない未知の波がたくさんある。さつそく僕はオーストラリアのビッグウェイバーの友人と、自分の知っているアウターリーフを見に行くことにした。20ftはある、信じられない波が割れている。そして他にも3カ所くらい見に行つた。

朝から車を走らせ、山を越え、岬の先端まで歩いていく。とにかく波がいいのはわかつた。問題はそこまで行くジェットスキーだ。僕はまだトウインはしたことがなく、いきなりこんなデカイのは無理ということで、いろいろ地元の手続きや練習をしてから、来年に向けて準備することにした。結局この日はマリブで2Rサーフした。波は東からなので、肩がダンバーにならず、最後まできれいにブレイクするとても形のいい波だった。次の日は、昨日よりも更にサイズアップしている。昼過ぎには進路を北側に向けるようだ。波をチェックしてみると、波はものすごくでかく、僕がここ8年勝浦で見た中では最大であった。しかも、一日中オフショア

(左上から時計回り)今回メインとなったレギュラーのポイント。インサイドまでの道は遠く、ずーっと乗れます。突然馬の群がやって来た。おとなしい馬なのだが、板を踏まれたら大変！/オースティン代表の川口さんのスタイリッシュなボトムターン。長年かけて磨いたスタイルに脱帽/毎晩、たくさんのごちそうを頂きました



が吹く珍しい日だった。一番沖のリーフは10mはあつたと思う。家から2、3キロ沖にあるこのポイントは、おそろく近い将来トウインの二級ポイントになるのは間違いない。もはや日本にもハワイぐらい大きな波がたくさんブレイクしているのだ。もちろんイオキのように、スペシャルなコースで、大きさを保てばの話であるが……。

### 最高の波を追いかけて、東北へひとつ飛び

今日のサーフィンを諦め、家に戻ってからひたすら水平線で割れる巨大な波を、コーヒーを飲みながら屋根の上から観察していた。すると芦沢崇君から電話があつた。「上の方へ行ってみない？」と。すぐさま青森が気に入り、とりあえず久しぶりだけど、向こうに住む川口さんに電話をしてみた。そしたら「大丈夫だよ、早くおいでよ」と言う。狙うなら明日の朝が一番サイズがあると思ひ、今日の最終便に間に合うように準備を進めた。カメラマンのケンユウ、ショウロク(宮内謙至プロ)も同行という。夜7時に羽田で待ち合わせをし、7時45分の最終便で青森に向かった。

青森空港に着くと、その時点で僕たちは台風を追い越していた。ゲート出口には芦沢君がいた。福島から昼のうちに東北道を走り、空港まで迎えに来てくれたのだ。むつ市まで2時間のドライブ。陸奥市に着くと川口さんがスケボーで迎えに来てくれた。

川口さんとの出会いは、いまから13年前。池袋サンシャイン

の展示会で。そして数ヶ月が過ぎ、僕がサーフショップで店番をしていたとき、電話があり、「今から青森に来て、明日スノーボードやるぞー」と誘われた。上野発の夜行列車の時間も調べており、何て強引な人なんだ、と思つた。でも店番は退屈だし、スノーボードもしたかったので、真冬の青森を目指すことにした。翌目を覚ますと、岩手のどこかの駅で、雪が積もっていた。何だか新鮮な風景で高倉健の映画に出てくるワンシーンのようだった。むつ市に着き、さつそく恐山にスノーボードに行った。スノーボードの後は、温泉やおいしい食事を楽しんだ。僕はとにかくいつもと違うところに行くのが大好きで、冬の雪国はとて冒険心をあおんでくれた。

次の日は車で何時間もかけ、八戸に向かった。車の中から一面の銀世界を見て、北国の人は冬の間に頑張りついているなと感じた。そして川口さんは、青森で湘南に負けないサーフショップやサーフィンがあることを僕に説明してくれた。現にむつ市のお店は、日本一きれいなサーフショップであるといつても過言ではないだろう。久々の再会で、話しは深夜まで盛り上がった。川口さんは相変わらずパワフルで、どうみても60歳には見えなない。奥さんも元気で、いつでも遊びにきなさい、と温かく迎え入れてくれる。

朝は早くから目が覚めたが、まだ曇っているということから、朝食を屋上で食べた。9時に家を出て、そこから25分でポイントに到着した。波は頭半だ



天候は突然快晴になった。真っ黄色の板が真っ青な水面に反射してとても綺麗。福島の声沢さんによる、このセッション一発目のボトムターン